九州天皇家論
7章　吉野の宮

九州天皇家の都

“淡海の海”は曽根の海

万葉266番歌
淡海乃海　夕浪千鳥　汝鳴者　情毛思奴尓　古所念

名歌中の名歌と評価されるこの歌は、天智近江京を詠ったものというのが一般的な解釈である。壬申の乱に敗れて、都は寂れた。廃墟となった近江京を見て、人麿は人の世の栄枯盛衰を詠ったと解釈されている。果たして、この歌は壬申の敗戦の近江京を詠ったものなのか。

情毛思奴尓

(1) 通常の解釈では「思奴に」は「萎れて」である。“心もしおれて”、と解される。
万葉集には「こころもしのに」の用例は八つ。短歌では五つある。

(a) 夕月夜心もしのに白露の置くこの庭にこほろぎ鳴くも
暮月夜　心毛思努尓　白露乃　置此庭尓　蟋蟀鳴毛　(8巻・1552)
(b) 海原の沖つ縄海苔うち靡き心もしのに思ほゆるかも
海原之　奥津縄乗　打靡　心裳<四>怒尓　所念鴨　(11巻・2779)
(c) あらたまの年返るまで相見ねば心もしのに思ほゆるかも
安良多麻<乃>　登之可敝流流麻泥　安比見祢婆　許己呂毛之努尓　於母保由流香聞
(17巻・3979)
(d) 夜ぐたちに寝覚めて居れば川瀬尋め心もしのに鳴く千鳥かも
夜具多知尓　寐覺而居者　河瀬尋　情<毛>之<努>尓　鳴知等理賀毛 (19巻・4146)
(e) 梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ
宇梅能波奈　香乎加具波之美　等保家杼母　己許呂母之努尓　伎美乎之曽於毛布
(20巻・4500)

意味は、「心も萎れて」である。これらの歌では、上の句と下の句は「順接」に繋がる。
(c) あらたまの年返るまで相見ねば心もしのに思ほゆるかも
新しい年が来るまで会うことができないならば、心も萎れて君を思う。

(2) 「夏草乃　思志萎而」が「萎れて」
人麿が明らかに、「萎れて」という意味で詠った歌が、万葉138番歌である。原文でみてみましょう。

石見之海　津乃浦乎無美　浦無跡　人社見良米　滷無跡　人社見良目　吉咲八師　浦者雖無　縦恵夜思　潟者雖無　勇魚取　海邊乎指而　柔田津乃　荒磯之上尓　蚊青生　玉藻息都藻　明来者　浪己曽来依　夕去者風己曽来依　浪之共　彼依此依　玉藻成　靡吾宿之　敷妙之　妹之手本乎　露霜乃　置而之

来者 此道之 八十隈毎 萬段 顧雖為 弥遠尓 里放来奴 益高尓 山毛超来奴 早敷屋師
吾嬬乃 兒我 夏草乃 思志萎而 将嘆 角里将見 靡此山

この訓みは、「我が妻の子が 夏草の 思ひ萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡け この山」である。意味は明らかである。子が、夏草のように、気持ちが萎えて、嘆くであろう。人麿は、「しおれて」という意味の場合は、「思志萎」と、「萎」を使っている。「思奴」と「萎」は漢字が持つ意味が異なる。「思奴」は「しおれて」という意味にならない。

(3) 「思奴」とは「品」

「思奴」を「品」と読みました。吉本隆明氏の指摘がある。

> ぼくがみつけた言い方では「てるしの」があります。「しの」というのは品と同じで、太陽が輝いている、輝いている太陽という意味です。奈良朝以後の言葉で「難波」の枕詞に「しなてるや(科照るや)」という言い方がありますが、これは賀茂真淵(1697～1769)以来、枕詞の考察では何の意味かよくわからないことになっています。わからないからいい加減な解釈をしていますけれども、「おもろさうし」をみると、「しなてるや」の逆語序が「てるしの」なのです。そうすると「しなてるや」は太陽が照るところのという意味になります。 (「詩人・評論家・作家のための言語論」 吉本隆明)

「品(しの)」とは名詞で、太陽のことである。「情毛思奴尓」とは、人麿の悲しく、沈んだ、暗い心に小さな灯りがついたということであろう。「品」の用法として、「しののめ(東雲)」を考えてみよう。

> しののめは、篠の目で、昔、住居の明かり取りに用いた篠竹の編み物の編み目をさし、そこから「夜明けの薄明かり」の意を生じ、さらに夜明け方の意に変化したという。 (全訳用例古語辞典・学研)

この解釈は、いささか、こじつけのように思える。「しの」=「篠」からの発想であるが、月や夜などへの認識はもっとリアルであった。

> 夜は、「宵・夜中・あかつき」の三つに分けて考えられ、「明ける」直前を「しののめ」といい、「あけぼの」は空がうっすら明るくなる頃をいう。 (古語辞典・旺文社)

「しののめ」とは「品の芽」であろう。つまり、日の出(太陽)の芽の意である。明ける直前の太陽の姿を見事に言い得ている。人麿歌の「思奴(品)」は、「しののめ」と同様に、「暗い中に認められる小さな光」という意味であろう。従来の解釈では、「思奴に」と、副詞として扱われている。「しのに思う」という修飾関係で理解されている。

ところが、「しの」は「品」である。「しの」は名詞である。「に」は格助詞である。「心もしのに」は、「心が品に(なって)」という意になる。「名詞+格助詞」の形である。

歌は「しのに」で切れる。「しのに思い出される」という意味にはならない。私の友人に「詩乃」という名前の女性がいる。女性の名前に、「しの」が使われる。この意味も、「明るい」、「輝く」であろう。「萎れて」では名前とならない。

(4) 情毛思奴尓

「情毛(こころも)」の「毛(も)」は、「も、また(too)」の意味である。「並列」の係助詞である。なぜ並列なのか。淡海の海と人麿の心が並列しているのである。淡海の海・波が夕日に輝いている。私の心も、また、品(明るく)になっていると、上句と下句、叙景と叙心が順接している。もし、「思奴に」が「萎れて」と云う意味と考えてみる。

淡海の海・波が夕日に輝いている。私の心も、また萎れている。これでは、上句と下句はつながらない。

汝鳴者

私たちは「千鳥の鳴き声」を悲しいものと聴く。

夜鳴く鳥の　かなしさは　親をたずねて　海こえて　月夜の國へ　消えてゆく
銀の翼の　浜千鳥　　（「浜千鳥」（作詞　鹿島鳴秋・作曲　弘田龍太郎）大正8年発表）

この歌は悲しい。日本人の“悲しみ”感情を表現した歌の一つであろう。私たちは、親をたずねる千鳥の鳴き声を悲しく聞く。作詞者、鹿島鳴秋は孤独な生い立ちだったと伝わる。この歌では、千鳥の鳴き声は、「萎れて」と同調する。近代日本人は千鳥の鳴き声を悲しく聴いた。それが「萎れて」という解釈と結びついたのであろう。
人麿は、どう聴いたのであろうか。人麿は千鳥の鳴く声を、「明るく」、「楽しく」聴いたのではないだろうか。

夕日に照り輝く淡海・・・・・・・・・・・・・・・
夕波が押し寄せて鳴く千鳥・・・・・・・・・

人麿は淡海の干潟に渡来してくる千鳥の鳴き声を子どもの頃から聞いて育った。千鳥の鳴き声を聞く度に、心が萎れていたのではなかろう。むしろ、子ども心に千鳥の鳴き声は楽しいものだったのであろう。近代日本人が持つ悲しみを人麿は持っていなかったであろう。千鳥の鳴き声を、「萎れて」、聞いたとは思えない。むしろ、癒されていた。今の言葉で言えば、「しのに」は「癒されて」に近いかもしれない。

淡海乃海

夕日に、波が押し寄せてくる。波はキラキラと輝き、千鳥がさわぐ。その鳴き声を聞くと、私の心も明るくなり、幸せに満ちた良き時代を思い起こす。時代は変わって、今は持統天皇の近畿天皇家の代となった。けれど、この夕日の淡海で鳴く千鳥は、昔と少しも変わらない。お前だけは変わらず私を慰めてくれる。
光の中、老いた詩人が佇ずむ。

さて、この 「淡海乃海」はどこか。大本命、「琵琶湖」をはじめ、諸説ある。歌では海と明確に詠われている。従って、海は海と理解すべきである。琵琶湖は湖である。琵琶湖は海ではない。
では、どの海か。人麿はすでに老いている。人麿の生誕の地、終焉の地は石見國である。kの石見國とは九州天皇家の石見國である。石見國は島根県ではなく、九州苅田町である。
梅原猛氏は、寛文十年に作られたという、「人丸秘密抄」をその著書で紹介している。（「水底の歌」上）

石見国美濃郡戸田郷小野といふ所に語家命（かたらひ）といふ民あり。ある時後園柿樹の下に神童ます。立よりとへば、答へて曰く。われ父もなく母もなし、風月の主として敷島の道をしると。夫妻悦てこれを撫育し、後に人丸となりて出仕し和歌にて才徳をあらはし玉へり。　　（人丸秘密抄）

人麿の生い立ちは、このように伝えられてきた。

「石見の柿本家に生まれた人麿は語部の綾部家で撫育され、後、成長して都で当代随一の歌人として名声をあげ、故郷に帰って死んだというわけである」　（「水底の歌上」・梅原猛）

しかし、梅原氏自身はこの説に否定的である。その理由は「石見」にある。梅原氏は「石見」を島根県とみている。故に考える。

「人麿のような教養をもった詩人が、到底僻地の生まれであるとは思えない。」　（同上）

だが、人麿が生まれた石見國は梅原猛氏が想定した島根県ではない。九州天皇家の石見國は苅田町である。九州天皇家の都は小倉南区の「淡海（近江）」に存在した。ここには九州天皇家歴代が住んだ「近江大津宮」と「吉野宮」がある。九州天皇家の都の中でも、最も華やかな、文化的な都であった。人麿が産まれた石見國はその隣である。人麿は九州天皇家の最も華やかな都のすぐ隣で産まれた。ここには、彼の才能を開花させるに十分な環境は十分整っていた。人麿が青春時代に詠った歌の歌碑が小倉南区の貴船神社に建てられて

いる。人麿が青春を過ごした所は小倉南区だったのである。
　倭歌の伝統を持つ九州天皇家の都「近江」の近くで、才能豊かに生まれ、伝統を支える名家で「撫育」された人麿である。

　「人丸秘密抄」に紹介された「石見國・美濃郡」は、「神名帳」にも「石見國の郡」として残っている。「人丸秘密抄」に伝えられた人麿像が真実であろう。人麿は九州天皇家の「石見國（苅田）」で生まれ、倭歌の素質を磨き、数多くの歌を読み、成長して九州天皇家に仕えた。そして、天武3年に「石見の國」の国司に任命された。
　「石見の國風土記」に人丸の記録がある。

> 石見の国の風土記に曰く、天武三年八月、人丸、石見の守に任ぜられ、同九月三日、左京大夫正四位上行に任ぜられ、次の年三月九日、正三位兼播磨の守に任ぜられる。

　石見の國とは人麿の故郷・苅田町である。壬申の乱に勝利して天皇位に就いた天武の朝廷の高官として、人麿は、石見の守に就任した。この栄光から、「石見の海」「淡海の海」を詠う人麿まで、どのような人生があったのか、私たちには分からない。だが、人麿が人生の晩年に、「古所念」と追憶を詠んだ「淡海乃海」は、故郷の「曽根の淡海」である。

（www.kita9.ed.jp/yoshida-e/kankyou/tiiki/higata.html）

夕波

　夕波とは何か。通常、この言葉も「夕方の波」という一般的な波をいってる、と理解されている。では「夕方の波」とは何か。「夕方の波」に何か特別な意味があるのか。「朝の波」「昼の波」「夕方の波」と波にその違いはあるのか。人麿はどんな波を見ていたのか。作歌場所が琵琶湖、あるいは博多の海、有明海等と考えた場合、「夕波」には、何か特別な意味があるとは思えない。

　だが、「淡海の海」が小倉南区の曽根の海だとなると、「夕波」は、たちまち、生き生きとした波となる。具体的な夕波の姿を描くことができる。曽根の海は干潟の海である。夕方になると、満ち潮が押し寄せてくる。干潟はたちまち、淡海となる。この様を、「夕波」と詠ったのである。周防灘から潮が押し寄せてきて、干潟は淡海とな

る。波が満ちて、干潟でえさをあさっていた千鳥は鳴き騒ぐ。この情景を「夕波千鳥　汝鳴者」と人麿は詠ったのである。千鳥は親を亡くして鳴いているわけではない。えさ場に波が押し寄せ来て、えさがうまくとれなくなって鳴いているのである。何百年と繰り返されきた曽根干潟の光景である。

潮が満ちてくると、曽根干潟はこの様な状態になります。コンクリートの道は水没します。
堤防から東方向の眺望ですが、曽根干潟には左側、北から竹馬川、大野川が、コンクリートの道の右側、中央に貫川、曽根干潟の右側、南端に朽網川が流れ込みます。
（homepage2.nifty.com/kitaqare/albu04.htm）

千鳥

琵琶湖で千鳥を見た人はいないという。琵琶湖には干潟がないからであろう。では「淡海の海」と詠われた曽根の海には千鳥がいるのであろうか。人麿が見た千鳥は今もなお曽根干潟（淡海の海）にいるのであろうか。インターネットでは曽根干潟の千鳥が紹介されている。ここには、人麿が見て、詠った千鳥が今もなおいる。

●曽根干潟は貫川河口にあり、干潮時に広い砂泥地を現わします。川から多量の栄養分が流れ込み、潮の満ち干きによって酸素が豊富に供給され、強い直射日光にさらされることにより、微生物が増えます。さらにその微生物をエサとしてゴカイや貝、カニなどの底生生物が生息することができます。そしてそれらの底生生物を求めてたくさんの野鳥がやってきます。初秋ともなると、繁殖地のシベリアから越冬値のオーストラリアや東南アジアへ渡るシギやチドリの仲間がここの干潟にたくさん立ち寄ります。特に絶滅が心配されているズグロカモメの越冬地として注目されています。ズグロカモメは全世界で約5000羽ほどしかいないと推定されているたいへん貴重な野鳥です。

「曽根干潟でシロチドリ。やはり岸寄りにおりました。」（www.k3.dion.ne.jp/~toritosi/01.2210niki.html）

「石見の海」と「淡海の海」

人麿が歌った「石見の海」と「淡海の海」はセットで理解されなければならない。「石見の海」とは苅田の海である。「淡海の海」は曽根の海である。人麿は故郷の対照的な二つの海を詠った。歌った時期は異なる。「石見の海」は妻との別れ歌で、人麿はまだ若い。ところが、「淡海の海」の歌は追憶の歌で、人麿はすでに老いている。

石見の海には、浦（入り江）もなく、潟（干潟）もない。

> 石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟はなくとも　鯨魚取り　海辺を指して

人麿は「潟はなくとも」と詠った時、淡海の海（曽根干潟）を想起している。淡海にはすばらしい干潟がある。千鳥もいる。優しい海だ。ところが、石見（苅田）の海には干潟はない。周防灘に面した荒磯の厳しい海だ。千鳥もいない。浦もない、潟もないと人は云う。淡海に比べて何もないと人はいうが、私はそうは思わない。石見には妻がいるではないか。しかし、私はその妻をおいて行かなければならない。

別離の哀しみに石見の海の厳しさが呼応する。晩年の人麿を迎えたのは、優しい淡海の海であった。

> 曽根の淡海の海。干潟に夕波が押し寄せてくる。波が夕日にキラキラと輝く。
> 潮が満ち、千鳥が鳴き騒ぐ。
> 時代は変ってしまったが、お前たちは私が若かった頃と変わらない。
> その鳴き声を聴くと、私の心に灯がさし、すぎさった良き昔が思い出されてくるよ。

実景と心象、現在と過去、視覚と聴覚、動と静、全てを詠いこんで、見事というべきであろう。